

氏 名	黒 川 雅代子
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（人間福祉）
学 位 記 番 号	甲人第22号（文部科学省への報告番号甲第556号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2015年3月17日
学 位 論 文 題 目	救急医療における家族・遺族支援の試み —悲嘆理論をふまえたジェネラリスト・ソーシャルワーク実践の枠組から—
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 芝 野 松次郎 （副査） 教 授 中 塘 二三生 教 授 坂 口 幸 弘

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、第3次救急医療施設で、突然家族を亡くした家族・遺族の現状とニーズを明らかにすることと、悲嘆理論を踏まえ、ジェネラリスト・ソーシャルワーク実践理論の枠組から、家族・遺族の支援方法について検討することを目的としている。

本論文は序章及び終章を含め5章から構成されている。以下に各章の要旨を示し、本論文の要旨とする。

序章では、本論文における研究の目的を述べるとともに、研究の学術的背景を述べた上で、研究の学術的特色と意義について説明している。第3次救急医療では、一般に援助は患者の死によって終了すると考えられているが、患者の死亡後もその遺族を支援する必要がある。本論文では、そうした患者の家族・遺族のニーズと支援を、家族・遺族の視点から捉えるところに、本研究のソーシャルワーク実践として、そして学術的研究としての重要性と独自性があるとしている。

第1章では、文献研究を通して、悲嘆研究については、歴史的な発展過程に基づき、段階モデル、位相モデル、課題モデル、二重過程モデルといった理論について検討し、複雑性悲嘆や悲嘆のプロセスを妨げる要因についても検討している。救急医療におけるグリーフケアについては、アメリカのモデルを検討し、文化的な違いに配慮しながら、ソーシャルワークの枠組から日本の救急医療における家族・遺族支援のあり方を検討し、死亡告知後の長期的な支援を含めて捉え直し、支援を構築する必要性を訴えている。ソーシャルワーク理論については、ジェネラリスト・アプローチ、岡村理論、ライフモデル、ケースマネジメント理論、危機介入モデル、ナラティブアプローチを丁寧にレビューしている。その上で、ソーシャルワーク援助と悲嘆理論との関係を論じながら、悲嘆理論が遺族の心理社会的な課題を捉え、遺族がどのような変化のプロセスを辿るかについて述べるに留まっており、具体的な支援の方法については十分に語られていないとしている。そして、日常生活の中で負担を複雑化させない支援が必要であり、そのためには悲嘆理論にジェネラリスト・ソーシャルワークの視点を取り入れ、家族・遺族支援の新たな枠組を検討する必要があるとしている。

第2章では、本研究の目的を果たすために、5つの調査仮説を設定し、量的調査（郵送による質問紙調査）及び質的調査（インタビュー調査）を実施するための方法を説明するとともに、調査結果について述べている。調査仮説は、1）突然亡くなった患者家族は社会福祉的なニーズを持っている、2）第3次救急医療施設でソーシャルワーカーが突然亡くなった患者の家族に介入する必要がある、3）家族は、医療者の共感的な態度については、好ましく覚えている、4）医療者の態度が、受けた医療の満足度に影響する、5）受け

た医療の満足度は遺族の悲嘆に影響を与える可能性がある、の5つである。本章第1節では、第3次救急医療施設で亡くなった患者家族に対して実施した量的調査ツール（質問紙）の作成方法とその内容について述べた後、調査結果について説明している。質問紙の内容（項目）は、1）対象者の基本属性、2）患者搬送時の状況（3項目）、3）治療中の医療スタッフの援助状況及び家族のニーズ（5項目）、4）死亡時の医療スタッフの援助状況及び家族のニーズ（5項目）、5）死亡退院後の遺族のニーズ（5項目）、6）Radloffの抑うつ尺度CES-D短縮版（11項目）、7）Shearの複雑性悲嘆尺度である。調査対象者は2003年8月から2006年12月までにA救命救急センターに心肺停止状態で搬送され、入院に至らずに亡くなった患者の内、倫理的配慮や住所不明で郵送できなかった人を除いた395名の家族である。その内103名から有効な回答を得ている。分析の結果、5つの仮説を概ね支持する結果を得ている。本章第2節では、量的調査の対象者の中からインタビュー調査に応じた遺族22名を対象事例とし、量的調査の結果をより具体的に裏付けるために質的調査を事例調査として実施することによって、患者搬送時の状況、治療中の医療スタッフの援助状況、死亡時の医療スタッフの援助状況について詳細に把握するとともに、家族・遺族のニーズについて明らかにした結果について述べている。

第3章では、こうした量的調査及び質的調査から得られた結果について総合的な考察を行っている。考察は5つの仮説について順次行うのではなく、あえて家族・遺族の死別体験のプロセスに沿って行うことにより、悲嘆理論を踏まえたジェネラリスト・ソーシャルワーク実践理論に基づく第3次救急医療施設での家族・遺族に対する支援のあり方の検討に、調査結果をよりよく活かそうとしている。家族・遺族の死別体験プロセスを、時間軸に沿って1）患者の搬送時、2）治療中、3）死亡時、4）死亡退院時、そして5）死亡退院後という5つのフェーズとして捉え、それぞれのフェーズにおいて医療スタッフの援助状況、家族・遺族のニーズ、そして家族・遺族への援助を、量的調査及び質的調査によって得られた結果から詳細に考察している。さらに、本章では、こうした考察に基づき、救急医療における家族・遺族支援についてミクロレベル、メゾマクロレベル、そしてマクロレベルでの援助方法に関する提案をまとめている。ミクロレベルでは、ジェネラリスト・ソーシャルワークの視点から家族、そして遺族となってからのニーズを全体的・包括的にアセスメントし、直接的、治療的な援助のみならず他機関への紹介といった援助を含む多角的な支援が必要であるとしている。メゾマクロレベルでは、救急救命センターに、ジェネラリスト・ソーシャルワークの視点を持った家族担当スタッフ（ソーシャルワーカーが望ましい）を置き、家族への対応に差がでないようにミニマムスタンダードを設けることを提案している。救命救急センターにおいて24時間体制で家族担当スタッフが対応し、死別後の遺族の生活困難を予防、援助することも必要となる。それを可能とするためには、救命救急センターに勤務するソーシャルワーカーの量と質を確保する必要がある、そのための制度改革を、マクロレベルでの提案としている。

終章では、本研究の結論をまとめるとともに、量的調査及び質的調査（事例調査）の限界について述べ、今後の課題についても言及し、本論文を締めくくっている。結論のまとめとしては、1）調査から明らかとなったように、受けた医療や医師からの説明や看護師の配慮といった第3次救急医療施設において医療や医療スタッフから受けた支援がその後の遺族の悲嘆が複雑化するのを予防することに関係し、医療スタッフの関わり方が受けた医療に対する満足度と関係していること、2）遺族となってから経験するさまざま困難において、遺族は家族や友人といったインフォーマルなサポートのみならず、経済的支援、医師やカウンセラーといったフォーマルなサポートも必要としている点を考慮すると、患者が搬送され、治療を受けている段階から、家族に対してジェネラリスト・ソーシャルワークの視点から包括的なアセスメントを行い、長期にかかわることのできるソーシャルワーカーが必要であること、を強調している。調査の限界については、量的調査における低回収率がもたらすバイアス、そして質的調査において倫理的配慮によってインタビューが十分に深まらなかったことに触れている。今後の課題としては、本研究で得られた結果を実践に還元すること

としている。

論文審査結果の要旨

本博士学位申請論文審査委員会による黒川雅代子氏の博士学位申請論文審査の結果要旨を、課題も含め以下の3点に集約して述べる。

1. 学術的貢献：第3次救急医療施設における患者家族・遺族に対するソーシャルワーク援助に関する研究の必要性を明確化

黒川雅代子氏は、長年の間、看護師及び救命救急士として、また医療ソーシャルワーカーとして実践に取り組んできた。そして、研究者としても救急救命センターをフィールドとして研究に取り組んでいる。そうした実践及び研究経験の中で、第3次救急医療施設に心配停止状態で運び込まれる患者と、その突然の死を受け入れなければならない家族への医療スタッフの援助は、患者の死亡と退院によって終わるのでないという思いを持った。患者の死亡退院を境として家族から遺族へと変わり、長期にわたって問題を抱え、時として悲嘆を複雑化していく家族と接する中で、ソーシャルワーク援助が不可欠であるという思いを強めた。黒川雅代子氏は、この思いを単に思いに留まらせるのではなく、科学的に検証し、援助のあり方を探る必要があると考えた。そして、そのために科学研究費を取得し、長期にわたって継続的、計画的に研究を進めてきた。本論文は黒川雅代子氏のそうした長年にわたる研究の成果であると言える。

黒川雅代子氏は、文献研究を通して、日本の医療やアメリカの医療ソーシャルワークにおいては、救急医療機関において突然患者の死に接した家族・遺族についての研究が不十分であるとした。患者搬送後の治療及び死亡の告知から患者の死亡退院に至るまでの間、家族・遺族がどのような反応を示し、何を必要としているかについての研究はあるものの、退院後の家族がどのように悲嘆を経験し、どのような精神的問題や生活上のニーズを抱え、どのような援助を必要としているかについての研究はほとんどなされていないことを明らかにした。

そして、黒川雅代子氏は、量的・質的調査を通して、患者の搬送時、治療中、死亡時、死亡退院時、そして死亡退院後という患者家族・遺族の死別体験プロセスにおいて、医師や看護師といった医療スタッフの関わり方と家族のニーズを詳細に検討し、これまで学術的研究が注目してこなかった問題に光を当てたと言える。その結果、患者搬送、治療中、そして死亡時に医療スタッフが患者家族に対して行う説明や患者家族への配慮が、死亡退院後の遺族の悲嘆の複雑化を防止する可能性を明らかにした。さらに、患者の死亡退院後、遺族となった患者家族は、多様な生活上の問題を抱えており、継続的な支援を必要としていることを明らかにした。その上で黒川氏は、第3次救急医療施設において家族が唐突に患者の死と直面する段階から、患者家族のニーズを包括的にアセスメントし、死亡退院後の援助に結びつけるソーシャルワーク援助の必要性を明らかにするとともに、そうしたソーシャルワークは、悲嘆理論を踏まえたジェネラリスト・ソーシャルワークである必要があることを、説得力を持って示した。

こうした黒川雅代子氏の研究成果は、第3次救急医療施設において突然患者の死を受け入れ、その後長期にわたって遺族としての生活を送らねばならない人びとに対する新たなソーシャルワークの研究領域を拓いたと言え、その学術的貢献は高く評価できるものである。

2. 実践的貢献：第3次救急医療施設における家族・遺族支援の実践のあり方を明確化

黒川雅代子氏が本論文において示した成果は、ソーシャルワークにおける新たな研究領域の開拓のみならず、第3次救急医療施設で亡くなる患者の家族・遺族が、その後の生活において経験する悲嘆の複雑化や、

経済的なニーズを含むさまざまなニーズを抱えながら経験する困難に対して、その予防のために医師や看護師といった医療スタッフがなにをなすべきなのか、そして、ソーシャルワーク援助がどうあるべきなのか、なにをなすべきなのかを示すものである。

患者搬送時から死亡退院に至るプロセスにおいて医療スタッフが患者家族に対して示す配慮の重要性、心細く感じている家族に患者搬送時から寄り添い、情報提供してくれる家族担当者の存在の重要性、死亡退院後に遺族が抱える悲嘆や生活上の困難を乗り越える援助のための包括的なアセスメントを死別体験プロセスの初期段階から始めることの重要性など、ミクロレベルにおけるソーシャルワーク援助のあり方を、量的・質的調査結果に基づき示した点は高く評価できる。

また、こうしたミクロレベルのソーシャルワーク援助を可能とするためには、第3次救急医療施設に、ジェネラリスト・ソーシャルワークの視点を持ち、包括的なアセスメントをすることによって、家族・遺族の問題解決に対して直接的に援助ができ、家族・遺族の複雑なニーズに対応するサービスを活用できるよう援助する家族担当スタッフ（医療ソーシャルワーカー）を配置することを訴えた。そうした家族担当スタッフの対応に差ができないようにミニマムスタンダードの作成も訴えている。そして、第3次救急医療施設にこうした専門職を配置できるように制度を整備する必要性を提案している。このようなミクロ、メゾマクロ、マクロレベルからの実践への示唆や提言は、第3次救急医療における家族・遺族支援のための新たなソーシャルワーク実践の実現に寄与すると考えることができ、実践的貢献として高く評価したい。

3. 課題

本論文は、学術的にも実践的にも貢献度の高い論文として評価できるが、以下の2点を課題として記しておく。

まず、本研究の目的を踏まえ、悲嘆やソーシャルワークに関する理論について行われた詳細な文献研究が、実証的調査に関わる仮説の設定や調査ツールの開発にわかりやすく反映されているとは言えず、文献研究が十分に生かし切れていないと思わせるところがあることである。もう一つの課題は、量的調査と質的調査の結果とその考察と結論との間にやや飛躍が見られ、黒川雅代子氏の思い入れが先行していると思わせる点である。両者とも本論文の質を著しく損なうものではないとしても、今後研究者として留意しなければならない課題であると思われる。

以上、審査結果の要旨を説明したが、黒川雅代子氏の論文は博士学位申請論文としての水準に達しており、博士学位の授与に値するものと判断する。